

琉球大学学術リポジトリ

民俗調査データベースの構築

－奄美諸島における墓地とエスノ・ボタニーの調査から－

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2009-11-18 キーワード (Ja): Web型データベース, エスノボタニー, 墓地, 比較, 集団調査 キーワード (En): 作成者: 津波, 高志, 稲村, 務, Tsuha, Takashi, Inamura, Tsutomu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/13188

民俗調査データベースの構築

—奄美諸島における墓地とエスノ・ボタニーの調査から—

津波 高志

Takashi Tsuha

稲村 務

Tsutomu Inamura

On Construction of an Anthropological Research Database: Processing Data from a Graveyard Survey and an Ethno-botanical Survey in the Amami Islands

民俗調査は人々の「声」の調査であり、生活の実態についての複合的な調査である。しかし、これまでのデータベースはそれぞれの声を文脈がわからない程に分解し、統合するという過程であり、「声」にとって一番重要な文脈を保存できておらず、複眼的な比較もできなかった。本稿では IC レコーダーとコンピュータソフトを使い、従来にない Web 型のデータベースの構築を提唱する。そうすることによって、民俗語彙、視覚情報、個々人の声、研究者の仮説とを有機的にリンクさせたデータベースの構築が可能になることを、奄美諸島の中の与論町における墓地にかんする調査のデータ化と大和村における人々の植物に対する認識のデータ化の事例を用いたデータベース構築を例として示す。

キーワード：Web 型データベース、エスノボタニー、墓地、比較
集団調査

1. 問題の所在

社会人類学あるいは比較民俗学において、大きな問題である「比較」の問題に接近するため、与論島の墓制の変化と奄美大島のエスノ・ボタニーの問題を資料化する過程から研究方法と技法を考案するのが小稿の目的である。

「比較」の問題は次のパラドックスをはらんでいる¹。

- 1 文化間、社会間の比較には両者間で共通性をもった概念に基づき両者を公平に比較しなければならない。
- 2 それぞれの民俗概念には歴史的、社会的、文化的文脈があつてそれを無視してはならない。

1、2の問題は相反した課題であり、社会人類学ではしばしば、ひとつの社会についてのモデルを構築し、それを他の同様の社会の事例に当てはめてみてその微細な差異を検討し、その差異から結論を導く視座を得るというアプローチをとり、それを「比較法」と呼んでいる。そのためには遠く離れた社会よりも同質性の高い一地域内で比較を行い、その差異を検討することが多い。しかし、この方法では東アジア規模での比較を行った場合、方法的な比較を出来ないという問題がある。

仮にアメリカの文化人類学にしばしばみられるように普遍的概念を設定し、それに基づき比較（あるいは対照）を行うというアプローチをとった場合、その概念が個別社会で同じ価値や歴史的、文化的文脈を持っているとは限らず、有効な結論に達しないというジレンマがある。つまり、ある社会で特定の文化的文脈をもつ事象が、他の社会では別の文化的文脈を持つ可能性があり、そうした文脈を明らかにするのが人類学の目的であるとすれば、このアプローチはむしろ文脈を不明確にするほうに作用してしまうということである。

¹ 人類学や民俗学における比較あるいは対照という概念については稲村は別稿でより詳しく論じている（稲村 1995b）。また、稲村の専門である中国の少数民族であるハニ族のデータと直接に「比較」することは方法論的にありえず、そうしたやりかたには批判的である（稲村 2003a）。

以上のパラドックスから考察されるのは、異なる社会において同一の研究方法をとりつつも、それぞれの文化的文脈を明らかにできるようなデータベースを構築するべきだということである。聞き取り調査においては、往々にしてある特定の民俗的概念がどういった文化的文脈をもつかは調査の最後までわからないことが多い。インタビューによって得られるデータを検索可能で、当該社会の人々の観念に近い形で、かつ社会的、文化的文脈を切断しない形で保存することが肝要である。その上で比較対照の可能な指標を考え出さなければならない。

そのためデータベース構築には以下のポイントに沿うこととした。

- ①地図や写真などの可視的な情報をデータベースの基礎にしてウェブ型のデータベースにする。
- ②インタビュー、会話をデータ化し、民俗語彙を指標として検索可能なものとする。

地図や写真は話者と調査者が共通して認識可能なものであり、それに基づき話者にインタビューをすることもできるという点で、調査そのものにも戦略的に応用可能である。また、人間の記憶は地図やものの形象など可視的な事柄に基づいていることが多く、土地の人々の考え方のモデルにもより近いものと考えられる。また、これらの視覚的データにインタビューの音声データを補充していくことによって問題を明確化することができる。これらのデータ化はデジタル処理によって近年データベース化が可能になってきたものである。

与論町には、2003年10月に初めて火葬場が設置された。同町は奄美諸島のなかで最後に火葬場の設置された地域であり、緊急に民俗調査の必要性がある。本稿における与論町の墓地のデータベース化は平成15年度文部科学省科学研究補助金基盤研究（B-2）（研究代表者：古家信平）に研究協力者として参加した時のデータ整理の際に得られた着想を基にしている。また、奄美大島大和村は琉球大学社会人類学コースの社会人類学実習で長年調査してきた地域であり、本稿のデータは実習参加者で共有し、今後も発展させてい

くものである。本稿でのデータベース化の試みは、集団調査のデータの共有化について考案されたものであり、新しい集団調査の一つのありかたを提示している。

2. データベースの具体例

(1) 与論町中金久墓地のデータベース

図1は与論町古里の中金久墓地の地図である。墓の中の記号は模式化されたもので、遺骨の入った甕、ガンブタと呼ばれる甕に二次葬を行うまでの葬地に置く宗教的装置、本土式の墓、墓標など特徴的な宗教的建造物をもとに地図を作成した。データベースではそれぞれの墓をクリックすると、ワードファイルに墓の写真をつけた図2のような図が出てくるようにハイパーリンクをつけ、これを全ての墓について行っている。

さらに図2にはこの墓について墓の持ち主や第三者の話がICレコーダーで録音された音声ファイルとしてリンクされている。そしてそれらの音声ファイルはクリックすると再生できるようになっている。ICレコーダーで録音した音声はパソコン上で編集することができる。例えば1時間の話を聞いたとして、それを話の文脈を損なわず、かつあまり長くならない程度に分割する。その音声ファイルを必要に応じてコピーしてリンクさせることもできる。こうした処理は同じ話が別の文脈においても有効な場合、異なるカテゴリーにもそれを配することができるという点で優れている。また、話者は調査者の質問どおりに答えるものではなく、しばしばこちらが予期せぬことを答えるものである。そうしたデータもこの方法で整理し直すとかかなりの部分生かすことができる。

またそれぞれの音声ファイルは表1のようにエクセル・ファイルで整理されており、特定の民俗語彙や内容、話者などで検索が可能であり、また同じ表のなかで音声の再生や画像をみるのが可能になっている。

民俗調査データベースの構築（津波・稲村）

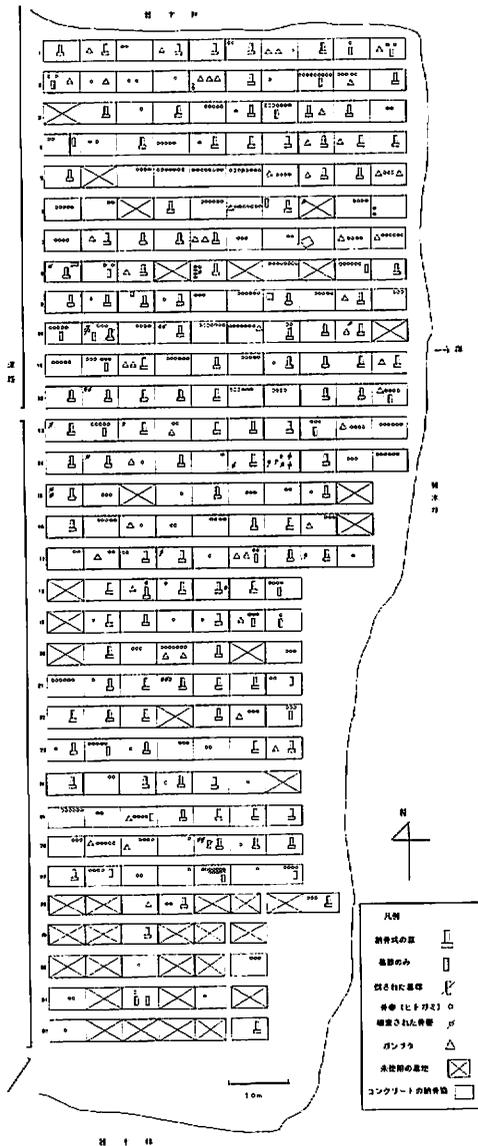
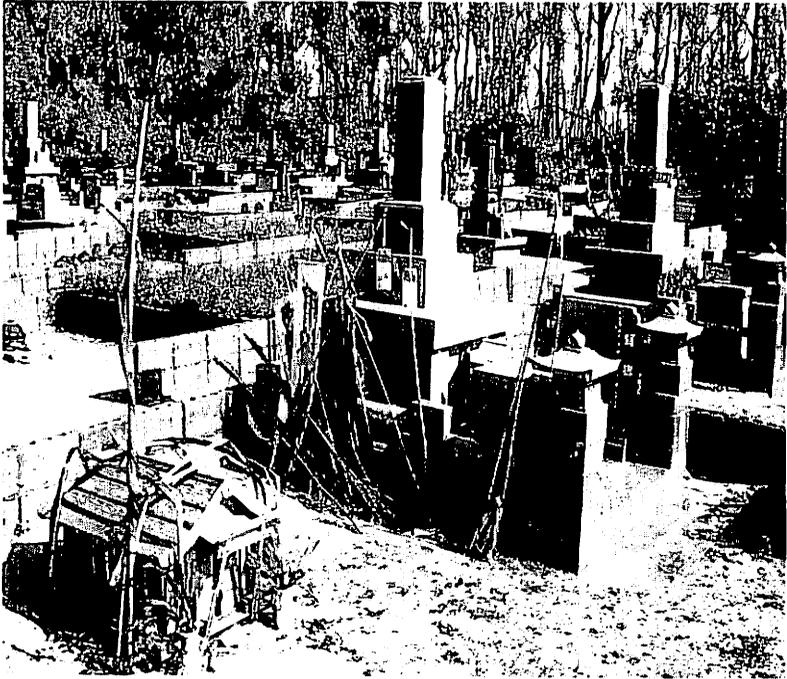


図 1 与論町古里 中金久墓地

武井基晃、津波高志、真野俊和、金吹貞、朴典栄、
稲村務、大城博美 2003年7月21日調査作成

X家



平成××年×月建造 ガンプタ1 カロート付きの墓

X家の話：P氏

X家の経済関係：P氏談

X家の主人

図2 墓地の説明の例（図1の各々の墓をクリックすると出てくるファイルの一例）

*下線部をクリックすると音声再生される。

表 1 墓地のデータを音声と画像をエクセルで処理した例

日時	場所	話者	内容	民俗語彙	画像 1	音声 1	音声 2
030713	古里	A	墓	ガンブタ	画像 1	音声 1	
030714	古里	B	葬式	ガンブタ、カイソウ（改葬）		音声 1	音声 2
030713	古里	C	墓	ジシ、サークラ	画像 1	音声 1	
030714	古里	D	年中行事	シヌグ、ホーネンサイ		音声 1	音声 2

* 下線部をクリックすると音声や画像が再生される。

こうしたウェブサイト型のデータベースを構築することでデータを民俗語彙主体にも個々の墓を主体にもすることができる。こうしたデータ処理の利点は一つの墓について同じ話者が別の機会に喋ったことも、別の話者が同じ墓について喋ったこと、あるいは全く別の文脈で出てきたその墓への言及など多角的なデータを集約できる点である。そうした、民俗語彙を中心にした辞書的なデータベース（個々の音声を辞書の用例のように扱う）と写真、地図を中心とした視覚的データベースを併用することで個別と一般の概念構築を簡便に行うことができる。

（2）奄美大島大和村のエスノ・ボタニー

人々がどのように事物を分類、認識しているかという問題は、人類学ではエスノ・サイエンス（ethno-science）と呼ばれ、植物分類の場合は特にエスノ・ボタニー（ethno-botany）と呼ばれている。これについても墓地データベースと同様に植物の写真をもとにデータベースを作ることができる。表 2 はエクセル・ファイルで作った例であるが、それぞれの植物について話者が説明している説明を音声ファイルとしてその植物そのものの写真を画像としてリンクしてあり、クリックすると写真と音声が出るようにしてある。ただし、今後は写真から学名を同定する作業などが必要であり、学名を付けた

列を挿入する予定である。また、別の場面の資料、例えば年中行事で使った例であるとか、料理として用いられた場合の写真や説明もそれに付加することができる。また、それぞれのデータの問題点を書いておき、それらを相互にリンクすることで、次の調査の問題点の析出や、問題の整理にも役立てることができる。

表2 奄美大島大和村のエスノ・ボタニーのデータを音声と画像をエクセルで処理した例

取材日	地域	話者	植物名、方言		
30816	湯湾釜	U氏	ヤマイチゴ、サンダタ、サタユー (砂糖湯)	音声	画像
30816	湯湾釜	U氏	コサン (竹の一種)	音声	画像1
30816	湯湾釜	U氏	ムン (バナナ)	音声	画像
30816	湯湾釜	U氏	ハゼノキ	音声	
30816	湯湾釜	U氏	竹の分類 ブフ、トウザイ、コサン	音声	画像1
30816	湯湾釜	U氏	サネン	音声	画像
30816	湯湾釜	U氏	ムジ、ムジノコ、バジ、イジュ、トームジ	音声1	音声2

* 下線をクリックすると音声や画像が再生される。

今回の調査では話者によって植物の呼び名に偏差が認められることがわかった。例えば、方言でムジと呼ばれる植物が、ある人によるとサトイモであり、別の人によればタイモであったりする。こうした呼び名についての知識の偏差が人（生産者か消費者などの関わり方、世代の差・など）によるのか、地域によるのか、あるいは文脈で使い分けているのかといった知識の配分や変異の問題についても今後データが拡充されれば、より実証的に解明される

ものと思われる。

また、民俗語彙間の構造的関係性が明らかになれば、土地の人々の分類の仕方の規則性が抽出され、そうした構造的把握は空間論、人の分類、宗教上の分類体系などにも構造論的に応用が可能になってくるものと考えられる。こうした大量のデータ処理が可能になってくれば、従来の構造論に見られる指標設定に対する恣意性の批判にも耐える資料作りが可能である。

3. 結語：今後の見通しとデジタル・データベースの活用

以上のようなデジタル・データベースは社会人類学、民俗学の分野において多様な比較対照の視座を提供する。また、こうした方法は得られた調査データの保存にほぼ完全な形式で、簡便でもありつつ、集団調査でもデータを共有しやすい特徴をもっている。もちろん、こうしたデータ処理は墓制やエスノ・ポタニー以外のデータ処理にも有効であり、すでに学部の社会人類学調査実習で試験的に学生のレポート作成に導入したところ調査データの正確性、まとめの効率性において良好な結果を得ている。

本稿の二例ではデータベースの基礎的指標を墓地の地図、植物の写真、民俗語彙などに置いているが、同様に村の地図であるとか、親族図、年表、ライフステージ、生業暦など図表を中心に整理していく方法も考えられる。調査者は自分の調査の枠組みにあわせて指標を設定し、それに資料（文字資料なども含む）を漸次的に付加していくのである。長期的な調査にも有効な指標を設定し、調査者と話者が共通して認識できるようなことをデータベースの基礎的指標として考えることが、こうしたデータベースを作るうえで調査者の工夫すべき最も重要な点である。

人類学や民俗学の資料の最も重要なものは話者の語るインタビュー資料であり、それは言い換えると音声データである。ICレコーダーによる音声データ処理によってたくさんの声がデジタル・アーカイブスとして保存が可能で

あり、今後調査を重ねることで様々な機会に収録されたデータやこれまでにテープレコーダーで収録された音声の処理も容易になり、大きなデータベースを構築することができるようになる。また、データを取り出すことも容易なため、音声そのものについて討議するような討論会も可能である。それによって論理反証性も高まり、より科学的な分析を行うこともできる。

従来のフィールドノート、あるいはカード型のデータ整理では、文脈の保存が難しいこと、書き付ける際にすでに一定の解釈が必要になるなどの問題があった。この場合、その場ではひとつの解釈ができていたとしてもそれを別の観点から解釈しようとするデータとしては使いにくいものになってしまうことが多い。しかし、フィールドデータとは常に自分がその場で気づい

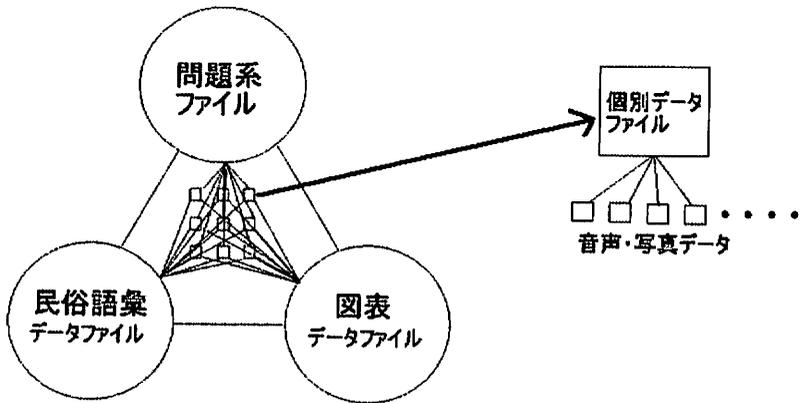


図3 ウェブ型調査データデータベース²

問題系ファイル＝調査上の疑問、課題、論文の骨子を整理するファイル
 民俗語彙データファイル＝表1、表2のような語彙中心のファイル
 図表データファイル＝図1のような地図などの図表中心のファイル
 個別データファイル＝図2のような写真などのファイル

² 図3を見ると予想外に、柳田国男の3分類（眼で見るもの、耳で聞くもの、心で感じるもの）の分類（柳田1925）に着想としては近いものになった。稲村は特に第三部について柳田の考え方に疑問を持つ者（稲村1995a）であり、民俗調査を一

ていない解釈の可能性を多分に含んだ性質を持ったデータなのである。従来のテープレコーダーの併用も巻き戻しの手間や整理したものとの対応を図るのに問題が多く、事実上発話そのものを取り出し可能なデータとして保存しているとは言いがたいのである。こうしたデータ処理によって初めて文字通り「データに語らせる」ことすらできるのである。

仮にギアツのように「文化」を「意味の網の目」(webs of significance) (Geertz 1973: 5) と考えた場合、文字通り網の目 (web) というモデルを使って、文脈を保持しながら資料を「厚く」重ねていく方法をとることができるのである。こうしたデータベースの全体を図示すれば図3のようになる。以上の説明のほかに調査者の問題意識をフィードバックするための問題系ファイルを作るべきである。それによって不明な点、疑問点を組織化し、データ全体を組織化するような章立てや問題を柔軟に設定できるようになり、聞き漏らしの確認や研究の方向性を現場で考えるのに役立つはずである。

これらの方法をとることによって従来の「比較」の論文にしばしばみられるような、民俗概念からいきなり過度に抽象化された、もしくは単純化された概念へ飛躍させるような議論を抑制することができる。こうしたデータベースは、土地の人々の持っているものの見方から概念を構築するという課題に即して、それぞれの民俗概念の用例や含意、象徴性などの脱落の少ない形でより有効で複雑な現実に対応した概念を構築するのに適している。そうして得られた概念こそ、大きな意味で「比較」の作業である「翻訳」にも応用されるべきなのである³。また、このようにして積み重ねられたデータから東アジア規模の真の意味での方法的な「比較」の糸口も見えてくるはずであ

定の型にあてはめるようなマニュアル主義に与する者ではない。こうしたウェブ型のデータベースにすると分類の厳密性はさほど重要ではなくなり、むしろ分類はそれをいかに構築するのが目的に対して効果的かと考えたほうがよい。しかし、使い方のひとつとして、柳田の分類にある程度沿ってデータベースを拡充したり、これまでの資料を分類し、こうしたデータベースと照らし合わせることも可能であろう。

³ 今年度発表した韓国語と日本語（李昌基 2004 津波訳）、八二語と日本語の翻訳（稲村 2003b）などにこうした翻訳の問題への応用が実践されている。

る⁴。

(付記)

本研究は琉球大学の大学教育研究重点化経費（「東アジアにおける琉球弧の島嶼社会文化環境の変容に関する総合的研究」研究代表者：大城肇 琉球大学アジア太平洋島嶼センター 平成14年度－15年度）による研究成果である。

参照文献

- Geertz, C.1973 Thick description: toward an interpretive theory of Culture. *Interpretation of cultures*. Basic Book.pp3-30
- 稲村務 1995a 「訳語としての「心意」－柳田国男と牧口常三郎『族』27号 筑波大学民族学研究室 pp.1-14
- 1995b 「比較民俗学と文化人類学における「比較」概念点描
－「アカ種族」社会における村門の意味」『比較民俗研究』12号
筑波大学比較民俗研究会 pp.128-142。
- 2003a 「日本古代史研究におけるハニ族資料の取り扱いについて
－比較民俗学の道」『琉大アジア研究』4号
琉球大学法文学部付属アジア研究施設 pp.63-80
- 2003b 「イデオロギーとしての『他界』
－雲南省紅河のハニ族の葬歌を通じて」

⁴ 津波の文化概念および民俗概念に対する立場は別稿で示している（津波 2001:2）。また語彙を中心とした韓国と沖縄の民族誌的实践例としては次のものがある（津波 1999）。

稲村はハニ族についてのデータベースの一部をホームページ（「ハニ語アカ語の時間」）で公開している。またそのデータベースについては琉球大学サイエンスフォーラム（2003年3月3日 於宜野湾コンベンションセンター）において「中国および東南アジアの山岳少数民族ハニ族のマルチメディア民族誌」と題して発表している。しかしながら、今回のデータベースは個人の情報が主のため、ホームページなどで公開するような性質のものではなく、あくまで資料の蓄積の仕方の問題である。また、デジタル化された音声データの管理にはプライバシー保護のため細心の注意が払われるべきである。

『比較民俗研究』19号 比較民俗研究会 pp.5-20

2000-2004 「ハニ語アカ語の時間」

<http://www.cc.u-ryukyu.ac.jp/~tinamura/index2.html>

津波高志

1999 『ハングルと唐辛子』 ボーダーインク

2001 『名護市史』 本編 9 民俗 I 名護市史編さん委員会

李昌基 (津波高志訳) 2004 「済州島家族制度の特徴 (中)」

『人間科学』 琉球大学法文学部人間科学科紀要 pp.399-406

柳田国男

1925 『郷土生活の研究法』 刀江書院

《使用した機材とソフトウェア》

I Cレコーダー Sony ICD-ST40

* ソニー製であれば基本的に Digital Voice Editor で対応できる

デジタル・カメラ * メーカーはどこのもので基本的に対応できる

Digital Voice Editor Version2.13

* ソニーの I Cレコーダーに付録としてあるもので音声の編集が容易であり、容量も小さい。

Excel 2002 Microsoft * 一般的な表計算ソフトでハイパーリンクが可能

Word 2002 Microsoft * 一般的なワープロソフトでハイパーリンクが可能

ホームページ・ビルダー Version5.0.3 IBM

* 地図をクリックするとリンク先が出るようにするため使用、通常はホームページを作成するために使用するソフト。